かかったが、仲介役を務めて下さった原田教授と中川講師、および国際化推進室のご尽力により無事締結に至ることができた。今後の教員間・学生間の交流や共同研究の実現に期待している。

同じく 12 月に開催された学生支援委員会にて「引きこもり等で危険な状態にある学生への緊急対処方針」を今後の対応時の参考資料として使用することが承認された。これは大久保教授が発案し、その後の学生支援室との協議を経てまとめられたものである。そのご尽力に感謝するとともに、大学に来なくなった学生との連絡を取る際のガイドラインとして有効活用されることを望む。

今年度をもって鈴木一実教授が定年退職される。2006 年に本学科に着任されて以降、多数の学生を有為な人材として社会に送り出されるとともに、2016 年から 4 年間は教育研究評議会の評議委員を務められたように、鈴木教授の在職期間における研究、教育および大学運営への貢献には計り知れないものがある。心より「この 14 年間、本当にお疲れ様でした」と言わせていただくとともに、今後のご健康とご健勝を祈るものである。また同じく年度末でご退職となる圃場実験施設の成宮衛嘱託員には、5 年にわたり農作業や栽培管理で一方ならぬお世話になった。ここに感謝の意を表したい。

一方、農業経済系の教員として後期から加藤恵理講師が着任された。林政学、農業経済学、環境社会学がご専門で、野生動物をはじめとした農山村をめぐる自然と人間の共生のあり方について研究されてきたようである。毎年約 1 億円の獣害を受けているとされる滋賀県でも、その解決に資するような研究・教育活動を展開されることを期待している。

最後になるが、一昨年 1 月の定例学科会議における投票で次期学科長に指名された時は、「うっかり者」を自認する私にそんな大役が務まるのか正直なところ不安でいっぱいだった。実際、会議次第の記述が間違いだらけで冷汗をかいたこともある。それでも任期を全うできそうなところまで漕ぎ着けられたのは、ひとえに私以外の学科教員のサポートのお陰である。この場を借りてお礼申し上げる。

・・・・・と、この締め括りのみ年明け早々に書き上げておいたのであるが、まさか年度末に新型コロナウイルスの流行によって大学行事がことごとく影響を受けるようになろうとは夢にも思っていなかった。来年度も入学式等の行事はもちろん、授業にも多くの支障が出るのは避けられない情勢となっている。今は 1 日も早い事態の収束を願うばかりである。

環境科学研究科

環境動態学専攻のこの一年

須戸　幹
環境動態学専攻長

2019 年度の在学生は博士前期課程 30 名、後期課程 9 名であった。前期課程で修士号を取得した 17 名のうち 2 名が本学の後期課程へ進学し、他の修了生も新しい環境で研究者や技術者として新しい一歩を踏み出すことになった。後期課程では、易容氏、平岩（横山）綾氏、稗田真也氏の 3 名が博士号を取得した。

今年度は、修士論文の最終版を求めた最初の年になった。2 月上旬の学位請求時に修士論文を提出するが、その後主査・副査による査読と、最終試験（発表会）を経る過程で、ほとんどの場合は手直しが入る。そこで、3 月の修了証書交付式までに修士論文の最終版のデータを提出してもらい、ハードディスクに保存することになった。ハードディスクは専攻長が引き継ぎ、データの閲覧は主指導の教員が認めた場合などに限定されることも周知された。

ハードディスクに完成版のデータを残すことは、今後、いつの時代であっても後進が完成版を見ることができる環境を整えたことになる。著者である修了生にとっては、修士課程のあいだに重ねた様々な努力と、最終的に到達できた証しが大学にいつまでも保管されていることになる。今後の人生の中で、そのことを何かの折に思い出し、また誇りに思ってもらえれば、最終版保存のもう一つの目的を達成できることになる。

2019 年の年末から、新型コロナウイルス（COVID−19）が中国大陸からアジア、欧米へと広がり、世界的なパンデミックとなった。感染防止の観点から 3 月 20 日の全学規模の学位授与式は中止となり、同日の午後に専攻単位の修了証書交付式のみが行われた。

本専攻には多くの留学生が在籍しているが、各国の入国制限や日本からの渡航制限の影響を受けた学生も少なくなかった。国内では、年度末に開催予定の学会や研究集会が軒並み中止となり、同じ分野の様々な研究者とのディスカッションの機会が失われたことは残念であった。しかし、これ

までのデータのまとめや文献の一気読み、実験計画の立案など、空いた時間を有効に活用した学生や教員も多かったと思う。

国内での移動制限やマスクをはじめとする医療用品の不足、国外での医療崩壊のニュースなど、現段階では大きな不安の渦中にある。しかし、種々の対策や政策、世界中で取り組まれているワクチンや治療法の開発により、近い将来、研究や教育が以前の通り行うことができる日常に戻ることを切に祈っている。

環境計画学専攻のこの一年

香川　雄一
環境計画学専攻長

2019 年度は，滋賀県立大学学位規程および大学院学則に基づき，論文提出によって１名（環境意匠研究部門）に博士（環境科学）の学位が授与された。また、環境意匠研究部門では 12 名、地域環境経営研究部門では３名の学生が博士前期課程を修了し、修士（環境科学）の学位を授与された。

環境意匠研究部門では修士論文、修士設計のいずれかを選択するが、本年度は修士設計７名、修士論文５名と、昨年度と同様に修士設計数が修士論文数を上回った。環境との関係で建築や都市をとらえようとする環境意匠の視点が，今年も多くの論文や設計に感じられ，頼もしく思えた。また、これも例年と同様であるが、フィールドワークや文献資料による緻密な調査、あるいはシミュレーションや実験の繰り返しによって得られたデータにもとづくものが多かった。最も優秀な研究の選考（質疑応答や批評）が公開の場で行われ、論文（竹を主構造とした建築物の経年変化後の構造性能に関する研究）に ED 賞（環境デザイン賞）が贈られることとなった。

地域環境経営研究部門では、修了した学生のうち２名が、湖国近江の風土、歴史、文化を継承し、環境と調和した循環型地域社会を形成するために、地域診断からまちづくりへの展開を提案し実行する知識とスキルを備えた「近江環人（コミュニティ・アーキテクト）」の称号を授与された。修了した学生には、大学院修士課程の当部門で学んだことを活かして、就職先の業務にも貢献できるように期待したい。

なお、環境意匠研究部門の在籍学生数は、博士前期課程 29 名（M1 が 14 名、M2 以上が 15 名）、博士後期課程４名、地域環境経営研究部門の在籍学生数は、博士前期課程７名（M1 が３名、M2 以上が４名）、博士後期課程１名であった。